

「すぐれる」「まさる」の意味変化 -コーパスによる語史研究-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際日本学部 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 牧郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21049

【献呈論文】

「すぐれる」「まさる」の意味変化

—コーパスによる語史研究—

Semantic Change of "Sugureru" and "Masaru":
A Study Based on the Corpus of Historical Japanese

田中牧郎
TANAKA Makiro

1. はじめに

語誌・語史の研究は、語彙史研究の基盤をなすことから、従来、多くの労力や期待がかけられてきた。このうち、任意の時代を取り上げて語のありようを記述する「語誌研究」については、佐藤（1983）や、日本国語大辞典第2版編集委員会（2000～2002）などで、組織的な集積も試みられている。一方、上代から現代までを通時的に記述する「語史研究」については、その用例の収集・整理にかかる膨大な手間と、通時的に一貫した記述を行う方法の難しさから、単発の論文は多いものの、組織的な集積には至っていない。

近年整備が進む、国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』は、奈良時代から大正時代までの資料を集成したものに発展してきており、資料の偏りは未だ大きいものの、通時的な用例収集に堪えるものになりつつある。このコーパスを使うことで、語誌・語史研究を、従来では望めなかったレベルで、精細かつ見通しよく展開していくことが期待される。そのような考えから、このコーパスで最初に整備が進んだ平安時代を対象とした語誌研究を行った結果を、田中（2016、2018）で発表した。本稿は、通時的な語史研究として、「すぐれる」「まさる」の類義語対を取り上げて、その意味変化を中心に報告するものである。

なお、「すぐれる」の意味変化については、生物学用語としての「優性」が、「すぐれた性質」と誤解されていることが問題視され、「顕性」に言い換える社会的動向（注1）が起きていることに関連させて、田中（2019）において触れたことがある。しかし、そこでは、漢字「優」と、この漢字を含む漢語の変化との関連から、「すぐれる」の語史のごく一部に触れるにとどまり、「すぐれる」の意味変化について十分に述べることはできなかった。

2. 『日本語歴史コーパス』の検索結果

『日本語歴史コーパス』の検索ツール『中納言』において、全体を検索対象にして、短単位検索で、

①語彙素読み「スグレル」、品詞「動詞」、②語彙素読み「マサル」、品詞「動詞」、の2つを検索すると、①は793件、②は2,094件が得られる。検索結果の用例群を見ると、①は、語彙素「優れる」だけに対応しているが、②は、「勝る」と「増さる」の2つの語彙素に対応していることがわかる。この②の用例群を見ると、その「勝る」「増さる」の2つの語彙素への振り分けが間違っているものや、どちらの語彙素に入れるか判別に迷うものが、少なからず含まれていることに気付く。また、①②の用例群いずれにも、語彙素読み「カツ」、語彙素「勝つ」とすべきものが、少なからず混じっていることもわかる。こうした実態を踏まえると、『日本語歴史コーパス』の検索結果をそのまま利用するのではなく、語彙素の認定や判別に関する考慮を独自に加えた上で、分析を進めなければならない(注2)。

現段階の『日本語歴史コーパス』は、奈良時代から大正時代まで、通時的につながっているとは言え、室町時代、江戸時代の分量がかなり少なく、明治時代、大正時代の分量がきわめて多いという、量的に不均衡なものになっているという問題がある。その不均衡なまま、検索結果の全例を等し並みに扱って集計するのでは、日本語の歴史を正しく反映したものにはならない危険性がある。そこで、時代的な不均衡が大きくなるように、コーパスの規模が大きい時代については、無作為抽出した用例に考察対象をしぼることにする。具体的には、コーパスの規模が小さい、奈良時代、室町時代と江戸時代については、得られた全例を対象にし(奈良時代には「すぐれる」は皆無)、コーパスの規模が大きい、平安時代、鎌倉時代、明治時代、大正時代については、時代ごとに「すぐれる」「まさる」「勝る」「増さる」の2つの語彙素は区別しない)それぞれ、50例ずつを無作為抽出して、分析対象とすることにする。無作為抽出した例の中に、誤解析が含まれていた場合は、その数を再度無作為抽出して足し込んだ。以上のような作業の結果、表1に示す数の用例を分析対象に定めた。

表1 分析対象とした用例の数

	奈良	*平安	*鎌倉	室町	江戸	*明治	*大正	計
すぐれる	0	50	50	22	20	50	50	242
まさる	47	50	50	19	40	50	50	306

*は、無作為抽出によって各語50例を対象にした時代

3. 国語辞典の意味記述

3.1 現代の国語辞典

現代の国語辞典で、「すぐれる」「まさる」を引くと、例えば、次のようにある。

すぐれる【優れる・勝れる】(自下一) ①ふつうよりもぬけ出た状態になる。まさる。「体力がー・優れた物理学者」②〔「すぐれない」の形で〕健康や天気などが、思わしくない。

まさる【勝る・優る】(自五) くらべてみて、ほかよりすぐれる。「体格でー相手・言わぬは言うにー」

まさる【増さる】(自五)〔文〕ました状態になる。「いとしさが一・冷え一」

(『三省堂国語辞典』第7版、以下『三国』と記す)

すぐれる【勝れる】(自下一)〈(なにニ一)〉才能・価値などが普通よりもはるかに望ましい段階にある。「すぐれた人材/健康(天気)がすぐれない/人並すぐれた〔=ほかの人よりきわだって優秀な〕頭脳を持つ」

まさる(自五)〔一〕【勝る】〈(なにニ一)〉比較の対象とするものより程度が上になる。「健康は富に一/すべての点において一/一とも劣らない〔=少なくとも同等以上だ〕/聞きしに一〔うわさで聞いた以上だ〕/無いには一〔=無いよりは、ました〕〔二〕【増さる】〈(なにニ一)〉前(ふだん)よりも多くなる。「水かさが一/いとしさが一」

(『新明解国語辞典』第7版、以下『新明解』と記す)

すぐれる【優れる・勝れる】(下一自)力・価値などが一般よりまさる、また立派だ。「師より一・れた業績」「なかんずく草書に一」▷打消しの形で、良い状態にないことをも指す。「顔色が一れない」。「すぐる」と同語源。他よりぬきんでているのでおのずから選ばれる意。まさる①【勝る・優る】(五自)他と比べて程度や質が上だ。他よりすぐれる。「実力は彼の方が一・っている」「悪知恵にかけては人より一」「聞きしに一寒さ」「他の武将たちに一ともおとらぬ戦功」▷(2)の転。他にもました状態である意。②【増さる】(五自)(次第に)多くなる。「川の水かさが一」▷自然に増す意。

(『岩波国語辞典第7版新版』、以下『岩国』と記す)

まず、「すぐれる」について見ると、普通(一般)よりも上にあることを言う『三国』『岩国』に対して、普通より遥かに上であることを言う『新明解』の記述が異彩を放っている。また、『新明解』『岩国』には、「才能」「価値」「力」など、よいと見る着眼点を具体的に記す記述があるが、『三国』には、それが全くない。『岩国』には、「立派だ」という、質そのものを指す記述があるのが特徴である。このように、「すぐれる」の意味記述は辞書によってかなり相違があるわけだが、どのようにとらえるのが適切だろうか。「まさる」のうち、【勝る】については、ほかと比べる、ほかより上といった、比較のありようは、3つの辞書で共通しているが、『岩国』にだけ、「質が上だ」という質への着眼がある。また、【増さる】については、多くなる、ました状態になるというところは、共通しているが、『三国』だけが、〔文〕という記号を示して、文章語性に言及している。

以上のような現代語の国語辞典の記述の検討を通して、比較のありようをどうとらえるのが適切か、質への着眼の有無はどうか、文章語性を認めるかどうかなどといった問いが導き出せる。こうした問いへの解答は、現代語の「すぐれる」と「まさる」の意味や文体的特徴が、歴史的にどのように形成されてきたかを見ていくことで、与えられていくのではないだろうか。

3.2 『日本国語大辞典 第2版』

歴史的視点に立つ国語辞典である、『日本国語大辞典 第2版』(以下、『日国』と記す)には、

次のようにある。用例は、各語義の初出例のみを引用する。

すぐれる【勝・優】

(1) 能力、技量、容姿、物の価値などが他よりまさる。他よりひいでる。抜きんでる。

* 霊異記〔810～824〕中・一四「敢へて能く余り溢れ飽き盈ちむや。我が先に設けしより佐（スグレタリ）。〈国会図書館本訓釈 佐 スクレタリ〉」（2）（ふつう、打消を伴って用いる）よい状態である。好ましい状態である。（イ）気分、調子などがよい。すこやかである。* 日本書紀〔720〕安康即位前一二月（図書寮本訓）「朝に見ゆる者は夕に殺されぬ。夕に見ゆる者は朝に殺されぬ。今妾（やつこ）等、顔（かほ）色秀（スクレ）ず」（ロ）天気などが気持よく晴れわたる。よい天気になる。

まさる【増・優・勝】

〔一〕（増）数量や度合いなどが多くなる。だんだんと増加する。程度・度合いがはなはだしくなる。ふえる。増す。* 万葉集〔8C 後〕一五・三七八一「旅にして物思（も）ふ時にはほととぎすもとな勿（な）鳴きそ吾（あ）が恋麻左流（マサル）〈中臣宅守〉」

〔二〕（優・勝）他と比べて価値、数量などがすぐれている。(1) 価値、力量などがすぐれる。程度が上である。他よりもいい状態になる。ひいでる。* 万葉集〔8C 後〕五・八〇三「銀も金も玉も何せむに麻佐礼（マサレ）る宝子に及（し）かめやも〈山上憶良〉」（2）身分、位などが上である。* 平中物語〔965 頃〕一「先だちてより言ひける男は官まさりて」（3）年月が先である。年が上である。* 源氏物語〔1001～14 頃〕明石「我よりよはひまさり、もしは位たかく」

「すぐれる」の(1)は、『新明解』や『岩国』の記述とほぼ同じであり、(2)は、現代の国語辞典では(1)の語義の中で説明されていた。「まさる」の〔一〕〔二〕も、現代の国語辞典の2義の分け方とほぼ同じである。一方、意味の説明は詳細になっており、「すぐれる」における比較のありようを、「抜きんでる」と説明したり、質への着眼に関連しては、「すぐれる」では「能力、技量、容姿、物の価値など」、「まさる」では「価値、力量など」と具体的に列挙したりしており、比較のありようや、質への着眼のありようから、2語の意味にアプローチしていく糸口を見せてくれている。これらのことは、3.1で導き出した、現代の「すぐれる」「まさる」についての疑問点に通じるところがある。

4. 用例分析の観点

『日国』における「すぐれる」の(1)の意味記述は、「能力、技量、容姿、物の価値など」とある要素と、「他よりまさる。他よりひいでる。抜きんでる」とある要素に分けることができる。同じく「まさる」の〔二〕（優・勝）の意味記述は、「価値・力量など」とある要素と、「他よりいい状態になる。ひいでる」とある要素に分けることができる。いずれも、前者は「着眼点」、後者は「他との比較」の観点から、語の意味をとらえた記述と見ることができる。この2つの要素は、用例には、次のように現れる。

- (1) 内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、容貌きよげにてうちつづきたまへる、いとめでたし。(平安・20- 源氏 1010_00031、注3)
- (2) ありはらの中將なりひら、こうしよく人にすぐれ、ゑいぐわ身に余りたる事をかきあつめて、(室町・40- 虎明 1642_05015)
- (3) かかる政党内閣にても超然内閣より優るといふ趣意なるか(大正・60M 太陽 1917_03030) 点線部が、「他との比較」における「比較対象」を示した部分であり、波線部が「着眼点」を示した部分にあたる。比較対象は、上例の「の中に」「に」「より」のほか、助詞をとらずに「中」あるいは「間」などで示されることもある。そして、辞書記述にはなかったが、「すぐれる」や「まさる」と叙述される「対象」あるいは「主体」にあたる要素が、文中に現れる場合がある。対象や主体にあたるものは、着眼点の基盤にあるものとして、分析が必要になる場合がある。

5. 「すぐれる」の意味分析

5.1 比較対象の分析

「すぐれる」は、(4) (5) のように、比較対象が文中に示される場合(点線部)と、(6) のように、それが示されない場合とがある。

- (4) 年来我に挑み競て勝る時も有りつ、劣る時も有て、年来を過つるは、此れ必ず只人には非じ。(鎌倉・30- 今昔 1100_14040)
- (5) 蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。(平安・20- 枕草 1001_00064)
- (6) 按察も、昔すぐれたたまへりし御声のなごりなれば、今もいとものものしくて、うち合はせたまへり。(平安・20- 源氏 1010_00049)

比較対象が示されない場合も、(6) が「昔は人よりもお声がひいでていたなごりなので」と解釈できるように、比較対象が文脈に潜在していると見ることができる。

比較対象が示される場合、(4) の「我」のように、一つの物事が比較対象になっている場合と、(5) の「よろづの草」のように、多くの物事が比較対象になっている場合とがある。表2は、比較対象が一つであるか、多くであるか、あるいは、示されないかによって、考察対象とした「すぐれる」の全例を分類し、その数と比率を集計したものである。

表2 「すぐれる」の比較対象

比較対象	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正
一つ			3(6.0%)	1(4.5%)		8(16.0%)	5(10.0%)
多く		22(44.0%)	30(60.0%)	11(50.0%)	10(50.0%)	19(38.0%)	8(16.0%)
表示なし		28(56.0%)	17(34.0%)	10(45.5%)	10(50.0%)	23(46.0%)	37(74.0%)
計	0	50(100%)	50(100%)	22(100%)	20(100%)	50(100%)	50(100%)

表2から、次のようなことがわかる。まず、江戸時代までは、比較対象は、示されない場合と

多くの物事である場合とが多く、一つの物事の場合ごく少ない。そして、明治時代・大正時代では、一つの物事の場合も見られるようになり、また、大正時代では、示されない場合が、非常に多くなっている。

このことから、「すぐれる」は、江戸時代までは、多くの物事との比較という意味特徴を持っていたが、明治時代に、その特徴が薄れ始め、大正時代には、比較を表さない意味に変化していると見ることができよう。

5.2 着眼点の分析

次に、「すぐれる」の着眼点について見ていこう。着眼点とは、何のどこに焦点をあてて「すぐれる」と言っているかということであるが、まず、「何」にあたるのが、人やそれに準ずる神仏や組織など意思を持つもの（以下「人」とする）か、意思を持たないもの（以下「事物」とする）かを分け、人・事物それぞれの「どこ」に焦点をあてているかで、「すぐれる」の用例を分類したところ、以下の14種類になった。各分類につき、用例を1例ずつ示した上で（傍点部が「何」に相当する語句、波線部が「どこ」に相当する語句）、ほかの用例に見られる、「どこ」に相当する語句をいくつか列挙する。

〈人の性質〉

- (7) 入道殿下のなほすぐれさせたまへる威のいみじきにはべるめり。(平安・20-大鏡 1100_02007)

才、才智、才学、知恵、徳、幸ひ、血気、心ばへ、家柄、器用骨柄、特色、この点、……

〈人の能力〉

- (8) 身にすぐれたる才能なければ、なにごとにつけても、その徳あらはれがたし。(鎌倉・30-十訓 1252_06034)

能力、才能、力、智力、手腕、腕前、技能、技倆、一能、語学力、……

〈人の容姿〉

- (9) (宮の御方は) 愛敬づきたまへること、はた、人よりすぐれたまへり。(平安・20-源氏 1010_00043)

見目形、形、けはひ、容貌、美容面、標致、気高い装い、顔のみぞいと若うきよらなること、…

〈人の健康〉

- (10) (あなたが) もしや御気ぶんのすぐれやらずおはし候やと朝夕御あんじもふし上候 (江戸・53-人情 1864_03003)

健康、顔色、気分、体質及体量

〈人の様態〉

- (11) 後々の御わざなど、孝じ仕うまつりたまふさまも、そこらの親王たちの御中にすぐれたまへるを、(平安・20-源氏 1010_00010)

孝行、恪勤、好む、時めく、制する、立ち塞がる、袖をしぼる、…

〈人の技芸〉

(12) 竹河うたひけるほどを見れば、内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人の中に声すぐれ、容貌きよげにてうちつづきたまへる、いとめでたし。(平安・20-源氏 1010_00031)

技、芸、歌道、和歌管絃、文武の道、玉突投球、鼓、縫針、拍子、弾く、…

〈人への評価〉

(13) 四條大納言のかく何事も、すぐれてめでたくおはしますを、(平安・20-大鏡 1100_02009)
やんごとなし、好まし、面立たし、気高し、讃めらる、世に重く思はれる、成績、…

〈人について着眼点非表示〉

(14) その中に、思ふに、ただ今の入道殿、世にすぐれさせたまへり。(大鏡・20-大鏡 1100_01015)

〈事物の性質〉

(15) 諸の経の中に、金剛般若、懺悔滅罪、勝れ給へり。(鎌倉・30-今昔 1100_11015)
品質、どよみ、滋養、潤ひ、気品、気候、地形、選択性、点、…

〈事物の様態〉

(16) たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうにわきかへるなど、いづれにもすぐれたり。(平安・20-更級 1059_00004)
逸興、良い、心を尽くたまへらむ、…

〈事物への評価〉

(17) ものの音のめでたくととのほり侍る事、外よりもすぐれたり。(鎌倉・30-徒然 1336_01220)
めでたし、めでたくととのほる、なまめかしうなつかし、清く正しい、温雅、芸術的価値、…

〈事物の効果〉

(18) 現在の生活に最も優れて役だつ文明の思想と様式とを選択したいと思ひ (明治・60M 太陽 1917_10010)
験、功德、子孫の栄を貽す

〈事物について着眼点非表示〉

(19) 恒徳公の法住寺いと猛なれど、なほこの無量寿院すぐれたまへり。(平安 20-大鏡 1100_02010)

〈時空間への評価〉

(20) 東京の士民は、狂するばかりの歡びと勇氣とをもて此の勝れて楽しく勝れて慶ばしき正月を迎へたり。(明治・60M 太陽 1895_03014)

最後の分類で、「何」にあたることを「時空間」としたのは、人などが活動する場としての時間や空間を示す語句が来る場合で、「事物」とは異なるタイプのものである。

表3は、上記の14種類別に、時代別の頻度と比率を示したものである。

表3 「すぐれる」の着眼点

何	どこ	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正	計
人	性質		3	7	2	2	15	8	37
	能力			2	1		2	8	13
	容姿		8		4	6	4		22
	健康					1	2	5	8
	様態		4	9		2			15
	技芸		8	4	9	5	4	1	31
	評価		11	6	1			1	19
	なし		9	6	2	3	5	8	33
事物	性質			2	1		7	10	20
	様態		2	1	1		1		5
	評価		3	2			2	3	10
	効果			3			1	1	5
	なし		2	8	1	1	6	5	23
時空間	評価						1		1
計		0	50	50	22	20	50	50	242

表3から、次のようなことを読み取ることができる。「すぐれる」の着眼点が示される場合、全体として、〈人の性質〉と〈人の技芸〉が多いが、室町時代までは後者が多く、明治時代以降は前者が多いという、時代的な交代が見られる。時代差についてより細かく見れば、〈人の様態〉〈人への評価〉が平安時代や鎌倉時代に多く、〈人の能力〉が大正時代に多い、という傾向も認められる。この2点から、「すぐれる」は、鎌倉時代や室町時代までは、人が取る様態、人が示す技芸、また、それらに対する評価に着眼して使われることが多かったものが、明治時代・大正時代には、人に備わる性質や能力に着眼して使われることが多くなってきたと言える。

表3において、全体としては少数派の、事物に着眼してとらえた部分を見ると、平安時代・鎌倉時代は、〈事物への評価〉が多いのに対して、明治時代・大正時代においては、〈事物の性質〉が多くなっていることも見て取れる。

以上のことから、「すぐれる」は、室町時代までは、外に現れる様態や技芸あるいは評価に着眼していたのが、明治時代以降は、内に備わる性質や能力に着眼するように、意味を変化させていると見ることができよう。

5.3 「すぐれる」の意味変化

本節では、「すぐれる」の意味を、比較対象と着眼点の二つの側面から分析した。その結果、当初は、多くの物事との比較であったものが、比較を表さないように変化したことと、当初は、外に現れる様態や技芸あるいは評価に着眼していたのが、内に備わる性質や能力に着眼するように変化したことがわかった。この二つの変化は、室町時代や江戸時代に起こったと考えられ、明治時代から大正時代にかけても、その方向への変化が継続している様子も見えた。

6. 「まさる」の意味分析

6.1 比較対象の分析

「まさる」についても、「すぐれる」の場合と同じく、(21) (22) のように、比較対象が文中に示される場合（点線部）と、(23) (24) のように、それが示されない場合とがある。

(21) 齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべめれど（平安・20-源氏 1010_00029）

(22) あまたが中に、なほ際まさりことなるけぢめ見えたるこそ、（平安・20-源氏 1010_00039）

(23) しかあれども、ただ今は、なほこの無量寿院まさりたまへり。南京のそこばくの多かる寺ども、なほあたりたまふなし。（平安・20-大鏡 1100_02010）

(24) 日にそへてうき事のみもまさる哉くれてはやがて明ずもあらなん（平安・20W 後拾 1087_14015）

比較対象が示される場合、(21) の「これ」（私を指す）のように、一つの物事が比較対象になっている場合と、(22) の「あまた」のように、多くの物事が比較対象になっている場合とがある。比較対象が示されない場合、(23) のように、前後文脈から比較対象の存在（(23) では、次の文の「南京のそこばくの多かる寺ども」）が読み取れるものもあれば、(24) のように、比較対象が存在しないものもある。この比較対象が存在しないものの中に、2節、3節で見た、【増さる】の語義に相当する例が含まれる。

表4は、比較対象が、一つの物事であるか、多くの物事であるか、あるいは、示されないかに、考察対象とした「まさる」の全例を分類し、その件数と比率を集計したものである。

表4 「まさる」の比較対象

比較対象	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正
一つ	18(38.3%)	17(34.0%)	18(36.0%)	8(42.1%)	20(50.0%)	42(84.0%)	39(78.0%)
多く		5(10.0%)	5(10.0%)		9(22.5%)	4(8.0%)	7(14.0%)
表示なし	29(61.7%)	28(56.0%)	27(54.0%)	11(57.9%)	11(27.5%)	4(8.0%)	4(8.0%)
計	47(100%)	50(100%)	50(100%)	19(100%)	40(100%)	50(100%)	50(100%)

表4から、次のようなことがわかる。まず、室町時代までは、比較対象が示されない場合が多く、一つの物事が示される場合がこれに次ぐ。多くの物事が示される場合は少なく、あっても「人より」「人並に」「他に」など、多数であることを積極的に明示しない語句がほとんどで、「すぐれる」には目立っていた、「もろもろ」「多く」「すべて」などの語句はない。そして、江戸時代からは、一つの物事が示される場合が多くなり、明治時代・大正時代では、そこへの集中が著しくなっている。

なお、比較対象が示されない例の内実は、時代によって変容がある。

(25) なにしかもここたく恋ふるほととぎす鳴く声聞けば恋こそ増され（奈良・10-万葉 0759_00008）

(26) 「もののあはれは秋こそまされ」と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは

心もうきたつものは、春の気色にこそあめれ。(鎌倉・30- 徒然 1336_01019)

比較対象が示されない用例群には、(25)の「恋」のように、人の心情や様態に着眼して、その度合いが上がってくることを言う、【増さる】の語義に相当する例が多い。一方、(26)では、「秋」という時空間への評価である「もののあはれ」に着眼して、後文脈に見える「春の気色」など、他の季節の評価と比較しており、【勝る・優る】の語義に相当する例もある。奈良時代は、比較対象が示されない29件すべてが【増さる】と解することのできる例であるが、平安時代では、【勝る・優る】と解することのできる例が1件見られ、それが、鎌倉時代になると3件、室町時代になると半数以上を占めるようになる。つまり、程度が上がってくるという意味の【増さる】の例が減少し、比較の意味の【勝る・優る】の例が増加している。この点に、「まさる」の意味変化を指摘することができる。

6.2 着眼点の分析

次に、「まさる」の着眼点について、「すぐれる」を整理したのと同じ手順で見えていこう。

〈人の性質〉

(27)勝田夫婦は左右より阿兼に取付て涙と共に尋ぬるは、生の親にも勝りたる情の上の情なり。(明治・60M 太陽 1895_09030)

心、心だて、志操、気品、広さと深さ、玉、花、…（「玉」「花」は比喩）

〈人の能力〉

(28)されどもあさいなが力やまさりけん(室町・40- 虎明 1642_04001)

心力、伸縮力、権能

〈人の容姿〉

(29)大宮は、いよいよ若くをかききはひなんまさりたまひける。(平安・20- 源氏 1010_00047)

かたち、ありさま、けはひ、愛敬貞、顔の色あひ、目鼻立ち、標致、光る、…

〈人の身分〉

(30)みな人のつかさくらのまさるには『かわらけわりて』『すゑさかへけり』(室町・40- 虎明 1642_01010)

際

〈人の心情〉

(31)ふればかくうさのみまさる世をしらであれたる庭につもる初雪(鎌倉・30W 新古 1205_06007)

恋、心、心労、つらさ、苦しさ、つれづれ、哀れ、物思ひ、ながむ、思ふ、苦勞する、…

〈人の様態〉

(32)いちめらるることこれにまされる人もあらん。(江戸・53- 人情 1832_02002)

たばかること、進歩、生活、慈しむ、かれる、ねぶ、菓膏を造ることを知れる、…

〈人の技芸〉

- (33) この内侍、琵琶をいとをかしう弾きゐたり。御前などにては、男方の御遊びにまじりなどして、ことにまさる人なき上手なれば、(平安・20- 源氏 1010_00007)
上手、築庭術、和歌を詠むこと

〈人への評価〉

- (34) 一夜ばかりの隔てだに、まためづらしうをかしさまりておほえたまふありさまに、(平安・20- 源氏 1010_00031)
おほえ、めでたし、はなやぐ、聞こゆ、哀れさ、尊さ、成績と評判

〈人への着眼点を表示しない〉

- (35) わ男、女と思ふたり共、男にまさらふぞ、こちをみたらばころさうぞ (室町・40- 虎明 1642_05032)

〈事物の性質〉

- (36) ゴーゴリは是迄の空想的分子の勝つた『近莊の夕』とは全く別な作風に移つた。(明治・60M 太陽 1909_06029)
悦、奇抜、感じ、色、美、色彩美、恨事、句調、長

〈事物の様態〉

- (37) み狩する雁羽の小野の櫟柴の馴れは増さらず恋こそ増され (奈良・10- 万葉 0759_00012)
行く、咲く、冴える、吹く、夜さむになる、深さ、はかなさ、露けし、…

〈事物への評価〉

- (38) まさるめでたきのふ仕る (室町・40- 虎明 1642_02019)

〈事物がもたらす効果〉

- (39) 此方法は……僅少の収入増加に優る物質上の効果をも挙げ得るであらう。(明治・60M 太陽 1917_04028)
結果、効力、効能、偉勲、成績

〈事物への着眼点を表示しない〉

- (40) 厳選は勿論濫選に勝る。(大正・60M 太陽 1917_13008)

〈時空間における性質〉

- (41) 今日の心づかひはことにまさりておほえたまへば、(平安・20- 源氏 1010_00035)
智、興、賑わい、花

〈時空間における心情〉

- (42) 人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり (奈良・10- 万葉 0759_00003)
寒さ、しほたれる

〈時空間における様態〉

- (43) 夜は次第に更けまさつた。(大正・60M 太陽 1925_14025)
荒れる、澄む、収量、国さんの血を絞つた、煙たつと詠じ給ひし

〈時空間における技芸〉

(44) 今日の新体詩は昔日にまさりて長篇の出づるあるを見る (明治・60M 太陽 1895_03002)

〈時空間における評価〉

(45) 作りたる田のよくて、こなたに作りたるにも殊の外まさりたりければ、(鎌倉・30- 宇治 1220_04004)

〈時空間への着眼点を表示しない〉

(46) 此里よのさとはまさりける (江戸・52- 洒落 1769_01001)

これら、20種類の着眼点について、時代別に整理すると、表5のようになる。

表5 「まさる」の着眼点

何	どこ	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正	計
人	性質	2	3	4		3	8	6	26
	能力				1		1	2	4
	容姿		6	1	1	5		1	14
	身分		1		1				2
	心情	36	10	4	4	10	1	3	68
	様態		6	10	3	6	4	4	33
	技芸		1	3				1	5
	評価		5	2		1		1	9
事物	なし		2	3	2	3	3	7	20
	性質		1	1			4	4	10
	様態	4	7	2	2	1	3		19
	評価				1				1
	効果						2	5	7
時空間	なし	2	3	15	3	5	18	13	59
	性質		2	1	1	1	2		7
	心情	3	1			1			5
	様態			2		1	2	1	6
	技芸						1		1
	評価			2					2
計	なし		2			3	1	2	8
	計	47	50	50	19	40	50	50	306

表5から、次のようなことが指摘できる。

当初、人の心情が極めて多く、特に、奈良時代では、80%近い高比率を占める。平安時代でも、人については、心情が最も多いが、様態や容姿も多くなっている。ところが、人の心情、様態、容姿は、やがて少なくなり、明治時代、大正時代では、人の性質が最も多くなっている。心情や様態のように、変わり得るものから、性質のように、変わらずに備わっているものへと、着眼点に変化していると見ることができる。

事物については、奈良時代・平安時代では、様態が多かったのが、明治時代・大正時代では、

性質が多くなっており、人の場合と同様の変化がある。時空間について使われることが一定数あることは、これがほとんどなかった「すぐれる」とは異なっているが、時空間においても、奈良時代は心情が多いという、人の場合と同じ傾向が認められる。

そして、人、事物、時空間、いずれにおいても、着眼点を表示しない例が、江戸時代以降増加していることも見て取れる。「すぐれる」が、当初から、着眼点を表示しない例が多かったことと、異なっている。

6.3 「まさる」の意味変化

本節で分析してきた「まさる」は、比較対象は、当初、示されない場合が多く、それが示される場合は一つの物事が多かった。江戸時代以降、表示されない場合よりも一つの物事を比較対象とする場合が多くなり、明治時代・大正時代では、それが大部分を占めるようになる。着眼点は、当初は、心情、様態、容姿のような、変わり得るものが多かったが、明治・大正時代には、性質のような、変わらずに備わっているものが多くなっていくほか、着眼点を表示しない場合が、江戸時代以降多くなっていくことも判明した。なお、比較対象を示さずに、心情や様態に着眼する場合は、【増さる】の語義に相当する例が多いが、その数は、平安時代以降減少し、明治・大正時代には非常に少なくなることもわかった。

7. 「すぐれる」と「まさる」の比較

7.1 比較対象から見た「すぐれる」と「まさる」

語別に分析してきた「すぐれる」と「まさる」の意味とその変化について、対比的に整理しよう。まず、両語とも、比較対象は示されないことが多かったが、その場合の用例のありようは異なっていた。「すぐれる」は、比較対象としての他者が、当該文中に表示されていないときも、文に潜在する他者を特定できることが多かった。一方、「まさる」は、比較対象が特定できないことが多く、その用法が【増さる】の語義に相当した。それは、自らの内部で何かが上がってくることや、自らの過去の心情や様態と比べて、現在が上にあることを言うものだった。

比較対象が示される場合、「すぐれる」は、多くの物事であることが多いのに対して、「まさる」は、一つの物事であることが多いという違いが見出せた。「まさる」が、多くの物事を比較対象に取る場合は、「すぐれる」のそれが、多数を表す語句を取るのとは異なって、多数であることを積極的に示す語句ではないという特徴もあった。

以上のような、「すぐれる」「まさる」の、比較対象による使い分けは、江戸時代ごろから崩れはじめ、「まさる」の比較対象が示されることが多くなり、「すぐれる」「まさる」ともに、比較対象が一つのものであることが多くなるのであった。

7.2 着眼点から見た「すぐれる」と「まさる」

「すぐれる」も「まさる」も、人について言われることを中心としながら、事物にも及ぶこともあった。「まさる」の方にだけ、人が存在する時空間について言うことが多かったのは、比較対象への視点が常に開かれている「すぐれる」と違って、存在自体への視点に限られがちな「まさる」は、他者に代わって、存在の背景である時空間との対比が行われやすいからだと考えられる。

着眼点を示さない例の比率が、「すぐれる」は時代を通じて変わらないのに対して、「まさる」は、事物について言う場合を中心に、明治時代以降増加する。これは、何らかの点で上にあるととらえられていたところから、存在そのものが上にあるととらえるように、「まさる」の意味が変化したことの反映と考えられる。

着眼点を示す場合、心情・様態・技芸・評価など、外から見えたり変わりやすかったりするものから、性質・能力など、外からは見えにくい変わりにくいものへと、用例の比重が時代的に移行していく流れは、「すぐれる」と「まさる」に共通していた。このことは、一つの物事を比較対象とする方向への変化と軌を一にするものと考えられる。

8. おわりに

以上、『日本語歴史コーパス』を使って、比較対象と着眼点の二つの枠組みから、「すぐれる」と「まさる」の通時的な意味変化の過程を記述した。記述の枠組みを定めることで、分類される用例数をもとに、各語の意味の特徴と、その変化の過程を、具体的に把握することができた。現代の国語辞典の記述から導き出される疑問点に即して、通時的な説明を与えることができ、コーパスを用いることで可能になる語史研究の意義を示せたのではないかと考える。【増さる】の語義の文章語性も、過去に優勢だった語義が明治・大正時代までに衰退したものであったことから説明できるだろう。一方で、室町時代や江戸時代の用例数の少なさは、その時代の用例が十分に得られないということだけでなく、語史をたどる上では、他の時代の用例の豊富さが十分に生かせないという問題を生じている。

また、和語の語史をたどるには、その表記に用いられる漢字や、その漢字を用いる漢語との関係を考慮することが不可欠である。田中（2019）で扱った「優」に加えて、「勝」「増」とそれを含む漢語の語史を分析し、「すぐれる」「まさる」の語史と総合することが必要である。例えば、明治時代には、「優秀」をはじめとした漢語のいくつかの基本語化し、その過程で「すぐれる」などの和語と緊密な関係を形成したが（田中 2005）、その基盤には、江戸時代までの、和語と漢語の関係性があったと考えられ、和漢の両系統の語史を通時的に関連づけていくことが求められる。

注1：「遺伝の法則「優性・劣性」変更を 誤解招くと学術会議」（『朝日新聞』2019年7月19日）など。

注2：誤解析を修正してある「コアデータ」だけを対象にすることも考えられるが、時代によっては、コアデータだけでは、用例に偏りが出る場合があることや、コアデータであっても、

「増さる」「勝る」への用例の振り分けには問題があるため、ここでは、非コアデータも含めた全データを対象に、作業を進めることとした。

注3:『日本語歴史コーパス』から引用する場合の出典表示は、このコーパスの情報から、時代名とサンプルIDを記す。サンプルIDは、シリーズを表す記号、作品の略称、西暦、サンプルの番号から構成されている。

参考文献

- 佐藤喜代治編（1983）『講座日本語の語彙9～11 語誌Ⅰ～Ⅲ』（明治書院）
- 田中牧郎（2005）「漢語「優秀」の定着と語彙形成―主体を表す語の分析を通して―」（国立国語研究所編『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究―「太陽コーパス」研究論文集―』（博文館新社）
- 田中牧郎（2016）「平安時代の「しるし」と「かひ」―コーパスを用いた語誌研究―」（『国語と国文学』93-5）
- 田中牧郎（2018）「平安時代の「もろもろ」と「よろづ」―コーパスによる語誌研究―」（沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂）
- 田中牧郎（2019）「「優性」「劣性」問題の日本語史的事情」（『遺伝子医学』9-4）

使用辞書

- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大編（2013）『三省堂国語辞典 第7版』（三省堂）
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（2011）『岩波国語辞典 第7版新版』（岩波書店）
- 日本国語大辞典第2版編集委員会（2000～2002）『日本国語大辞典 第2版』（小学館）
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之（2011）『新明解国語辞典 第7版』（三省堂）

使用コーパス

国立国語研究所編『日本語歴史コーパス』（<https://chunagon.ninjal.ac.jp>）2019年7月20日検索。引用はコーパス本文によるが、読みやすさを考慮して、部分的に表記をあらためたところがある。

付記

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」、及び、JSPS 科学研究費 18K8514 の研究成果の一部である。